

一般的手続き：等質集団の半分（男女各4集団ずつ計8集団）と異質集団の半分（同様に、男女各4集団ずつ計8集団）に乱数表の集計作業を3期に分けて計60分間行わせ、残りの16集団に問題解決課題を3問それぞれ20分ずつ与えて解かせた（こちら合計60分間）。3問の問題解決課題は順序効果を相殺するためローテーション・スケジュールに従って与えられた。

独立変数の操作：①成員の構成（等質集団 対 異質集団）すでに表7で見たように、成員のIE得点に関して等質集団では標準偏差が小さく、異質集団ではこれが有意に大きく、かつ集団平均が両集団群で一定になるよう編成された。

②課題のタイプ（乱数表集計 対 問題解決課題）乱数表集計作業は基本的に第1実験と同様な課題であるが、集団の構成員が5人となったため、4人が分類作業者となって1枚目の乱数表のA, B, C, Dのブロックをそれぞれ担当し、そこに含まれる数字を10分類してカテゴリーごとの個数を正の字法で記入した集計票を「リーダー」にまわす（6.5分）。リーダーは4人の集計票を集めてカテゴリーごとの合計個数を計算し集計作業を完成させる（1.5分）。1分間休憩して、2枚目の乱数表の集計に同じ要領で取り組む。リーダーによる2枚目の集計が終わったところで質問紙調査（2分）が実施され、1分間の休憩に入って第1期の作業を終了する（休憩2回と質問紙調査への回答を含めて計20分）。続いて、第2期に3枚目と4枚目の乱数表を、第3期に5枚目と6枚目の乱数表を同じ要領で集計し、それぞれの期ごとの質問紙に回答した（3期合計で60分間）。

問題解決課題は、柳原（1976）と柳原（1982）に依拠して（a）10kgの液体、（b）バスは待ってくれない、（c）エネルギー・インターナショナル社（略して、E・I社）と命名される3問が用意された。（a）は容積のわからない2本のビンの中とその中に入っている液体を利用してちょうど10kgの水を用意させる問題、（b）は歯痛になった花子さんを隣の歯医者まで行かせるため地図を作成させる問題、（c）は被験者たちがE・I社のゼネラル・マネジャーの立場に立って、同社のブラジル支社総支配人として最適の1名を7名の候補者リストの中から選ばせる問題である。因みに、

白樫（1978）の実験はE・I社の問題を用いて行われている。いずれも問題を解く手掛かりとなる情報を集団の成員に分割して与えておいて集団で討議させ、正解を導き出させるものである。われわれの実験ではこれらの問題をプリテストし、難易度その他を調整するため原問題に若干の修正（主として、成員に配布する情報カードの改変による）を加えた。1問につき集団討議12分、達成度調査用紙への記入4分、質問紙調査への回答2分、休憩2分の計20分が当てられた（したがって、3問の合計で60分間）。これら（a）（b）（c）3問は順序効果を相殺するためのローテーション・スケジュールに従って、各集団に順序を変えて与えられた。

③時間的推移（第1期、第2期、第3期）すでに課題の説明で述べた通り、両種の課題はいずれも質問紙調査と休憩を含めて20分単位に区切られており、これを1期として3回繰り返している。最初の単位から順に第1期、第2期、第3期と呼ぶことにし、実験開始からの時間経過を示す指標とした。

従属変数の測定：第1実験同様、最も重要な従属変数は集団の生産性である。この他に白樫（1978）が用いたのと同じ質問項目からなる質問紙調査が各期の終わりに実施され、回答の事後的因子分析によって得られた因子が従属変数として用いられた。それらは、課題への動機づけ、凝集性（1）：集団への誘引、凝集性（2）：集団のまとまり、集団の雰囲気の4変数である。

④集団の成績乱数表の集計結果の得点化については、第1実験の方式に若干改良が加えられた。そのねらいは、見落とし・時間不足によるミスを数え過ぎによるミスより重視することと、リーダーのミスをはっきりさせた上で集団成績に反映させることであった。具体的な手続きは次の通りである。リーダー以外の4人が10個の分類カテゴリー（000-009, 010-019, 020-029, . . . , 090-099）にすべて正しい個数を記入しておれば200点与えることとし、個数の合計が200を超えている場合（数え過ぎ）はその超過分を200から減じ、不足している場合（時間不足か見落とし）はその不足分を2倍して200から減じた。次にリーダーが4人の集計結果をカテゴリーごとに合計する時に犯